

武蔵野起点雑司谷

国木田独歩記

神野 幸人

(会員 鎌倉市白)

盆・正月と五月の連休は、東京は静かな空洞になる。それを狙って、国木田独歩が武蔵野の起点とした雑司谷周辺を探索することにした。

「君と僕と散歩した事の多い早稲田の鬼子母神邊の町」とあるが、早稲田の大隈講堂と鬼子母神は直線距離にしても約二^三段、明治通りを横切る目白通り・新目白通り・早稲田通りそして都電と、現状ではとても一体には考えられないので、鬼子母神を起点に探索した(ここの鬼子母神像は鬼形ではなく、羽衣をつけ吉祥果をもち、幼児を抱いた菩薩形の美しいお姿をしているので、とく



鬼子母神

に角のつかない鬼の字を用い、古くより「雑司ヶ谷鬼子母神」と尊称されているので、独歩の早稲田の鬼子母神は間違いであろう)。

JR池袋駅東口の、最先端ファッションで彩られた街並みを抜け南へ約五〇〇^三段、昔が残る雑司谷界隈の鬼子母神堂は簡素である。おまつりする鬼子母神のご尊像は、室町時代の永禄四年(一五六二)現在の文京区目白台の池の邊で掘りだされ、安土桃山時代の天正六年(一五七八)《稻荷の森》と呼ばれた当地に、村人がお堂を建て今日に至るといふ。境内には武芳稻荷の赤い鳥居が連

立し、また高さ約三三メートルの周囲約一一メートル約六〇〇年という神木大公孫樹(おおいちよう)がある。

「君と僕と」とは信子と独歩のことで、その二人を見守つたであろうこの大公孫樹に語る術あらば、世の vari と人の世の vari を語つてもらいたい。神木の外、樺・椎ノ木等々あるが鬱蒼とした森というには程遠い。そして榎や櫟の雑木は一本もない。堂主さんのお話(数年前、もとこの付近に住んでいたという九十歳過ぎの老人が訪れ、今住宅になつたところは大きな沼で、よく釣りをしたとのこと)。

さすれば武蔵野も一面の雑木林ではなく、処々に沼や小川のある叙情ある風景であつたらう。鬼子母神から東に二〇〇メートル程の所に大鳥神社がある。社殿の外小さな能舞台があり、直径八〇センチ程の櫻が一〇本程がこじんまりとした森をつくり、周囲の雑音を遮つて閑静な別天地を作つて居た。この付近は東京音大の敷地で、都電雑司ヶ谷駅を過ぎると広大な雑司ヶ谷霊園がある。由緒ある霊園は多くの樹木に覆われて居たが、雑木林の昔景は皆無である。

雑司ヶ谷霊園から早稲田に向かう途中、学習院を一周

す。広大な敷地には樹木が生い茂り、高層の学舎もなく清楚な一画である。明治通り馬場口より、早稲田通りを経て大隈講堂に出た。歌で有名な森皆無なればケンパスに入る気もわかず(穴八幡に馬上狩り衣装の武士の銅像あり、ここは道灌が傘の代わりに山吹の花を貰つたという、歴史の原か)。

踵を返して雑司ヶ谷霊園に隣接する護国寺を探索した。広大な墓地には入らなかつたが宮内庁書陵部として、先の皇太后の葬儀の行われたところである。



大鳥神社



雑司ヶ谷霊園

独歩は武蔵野の西半面を多摩川を限界として丸子までさがり、八王子は決して武蔵野には入られないとされているので京王線で新宿より多摩川を渡り、百草園（もぐさえん）の丘より武蔵野を眺めることにした。独歩が「家弟をつれて多摩川の方へ遠足したときに一・二里行き、また半里行って家並があり、また家並に離れ、また家に出て人や動物に接し、また草木ばかりになる。此変化のあるので……多摩川はどうしても武蔵野の範囲にいれなければならぬ……其川が平な田と低い林とに連接する所の趣味は、恰も首

府が郊外と連接する處の趣味と供い無限の意義がある」と記した道はJR中央線沿線であらうが、平行して走る京王線沿線も同景であつたらうに、現状は民家軒を連ね絶ゆるなし、くの字くの字の急な坂の百草園台地は多摩川を眼下に遙か、国立市・府中市・小金井市を展望できる絶景地であるのに、独歩がここを訪れていないのは残念である。

独歩の時代、甲武線は立川が終点で、立川以西の街道と、中原街道以北の多摩川の橋の有無を考慮すると、独歩の健脚をしても難であつたか？

国木田独歩著「武蔵野」の第六・第七を二回にわたりに、夫婦二人で探索した。百年前の旧地の変貌は浅学の小生では詳記できず、残念至極だが。小金井堤や鬼子母神堂の存在をこの目で確認したことに喜びがあり、また長堤の桜並木、くの字くの字の急坂を汗して同行した妻と供にした喜びが一入であつた。

（平成一三年五月五日（土）（薄曇））